「埴輪に込める古代人の想い」

太田市立太田中学校　１年C組
峯　拓未

「埴輪に込める古代人の想い」

太田市立太田中学校１年C組　峯　拓未

そのテーマにした理由

この東国文化自由研究の課題でこんなにも埴輪に興味を持つとは自分でも思っていなかった。
埴輪のことを知らなかった頃の自分は「埴輪は古墳の周りにおいてあるだけで特に意味があるのかな？」という疑問を持っていたがそのままにしてしまっていた。
僕はテーマを何にしようかと悩んでいた時に「かみつけの里博物館」に行った。そこでひとつひとつの埴輪が役者を演じていることを知り、この東国文化自由研究を通してその疑問をもう一度掘り起こしていきたいと思った。
埴輪に深い背景を感じた。だから僕は、古代人が埴輪ひとつひとつに込めた想いについて調べていきたいと思った。

目次

①埴輪について
②それぞれの埴輪の意味すること
③埴輪をおいた理由
④２つの古墳のはにわの置かれ方
⑤まとめ

調査方法

１、群馬県高崎市のかみつけの里博物館や群馬県立歴史博物館に行ったりして沢山の埴輪をよく観察してくる。保渡田古墳群に行って埴輪の配置についてよく観察してくる。他にも八幡塚古墳にあるという「王の棺」もよく見てくる。

２、中央図書館で借りてきた本やインターネットを使用して埴輪について詳しく調べる。

３、取ってきた写真や調べた資料などを使って「みんなに面白い！」と思ってもらえるようにGoogleドキュメントにまとめる。まとめた最後には使用したサイトを書くこと。

調査内容

①埴輪について

埴輪とは、古墳の外部に並べられた素焼きの土製品。古墳時代の人々が生み出した、日本独自の焼き物である。埴輪は、円筒埴輪と形象埴輪に大別される。形象埴輪は更に、家形埴輪・器財埴輪・人物埴輪・動物埴輪に分類される。

これらの埴輪は、それぞれの役割を持って古墳を飾るように並べられた。

②それぞれの埴輪の意味すること

円筒埴輪

円筒埴輪は聖域である古墳を周囲から区別する、結界や仕切りのような役割をする。もともとこの穴は、表面についていた模様を目立たせるために開けられた穴だった。しかし次第に模様がなくなり、最後は穴だけになってしまったそうだ。

表面の装飾や穴は**魔よけ**の名残で、穴には丸だけでなく三角形や四角形のものもある。

他にも人面付きの円筒埴輪や塩顔の人面付き円筒埴輪もあり、非常に珍しい。冠をかぶっているように見えるためその地域の王様の表情モデルにして作られたのかもしれないと言われている。　あっさりした端正な顔立ちをしていて現代でいうイケメンかもしれないとも言われている。

動物埴輪

動物埴輪は、鳥、馬、イノシシ、鹿、魚、猿、犬牛などの身近な動物の埴輪が多く見つかっている。変わった物だとムササビがある。この中で特に目立つのは、装飾品を身につけた馬の埴輪だ。馬は高い財力や軍事力を象徴する動物として大切に扱われていたのではないかといわれている。有力者が亡くなった後でも力を示すものとされている。

動物埴輪には、鵜方埴輪という鵜の形をした埴輪がある。とても激レア！また、細部に注目すると…首に小さな鈴が見える！このことから飼われていた事がわかる。そしてこれは、古墳時代から鵜飼いが行われていたという大事な証拠だ。鵜飼いも王の儀式の１つであったそう。

人物埴輪

人物埴輪は、さらにバリエーションが豊富で貴婦人から農夫まで、様々な階級の人がそろっている。人物埴輪は、演劇のように集団シーンを表現している。狩りや儀式を埴輪で表現している。また、群像とは全く違う目的で立てられ、古墳の外側で古墳を守る役目ともされている。

左の埴輪は、「両手を腰にあてる振り分けた髪の男」という名で国宝とされている。埴輪を作るだけでも難しいとされているのにこの髪型を作るには、かなり高度な技術が必要だ。

他にもポーズや服装にも注目してみると、大きく口を開けて両手を振る埴輪がある。彼らは葬儀の際に歌って踊る農民の男女と解釈され「踊る人々」と呼ばれている。しかし、近年は、馬の手綱を取る男性２人組との説も出ているそう。（馬飼）
踊るようなポーズの埴輪は、他にも沢山見つかっていて本当は何をしているポーズなのかはとても気になるポイントだそう。

足が形としてしっかり作られていないことか本当は馬馬に乗っているのかもしれないという説が出ている。

人物埴輪の
武人埴輪

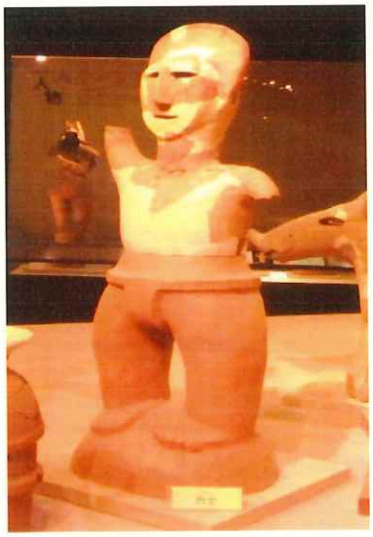
武人埴輪は、人物埴輪の１つで、武器や武具を身につけている。右の武人埴輪は、「甲冑をまとう武人」として国宝に指定されている。この武人埴輪は、墓の主の権威を示すとともに、外敵から墓を守る役割をもっていたとされている。（魔除けや災いを防ぐ役割）
そして、左の写真を見ると矢を入れて背負う武具が背中についていることがわかる。右の写真でも手には、刀ではなく弦弓を携えている。それよりも特徴的なのは冑で冑の頂きには鳥の羽や毛などの飾りをイメージして作られたといわれている。

馬飼型埴輪

馬飼型埴輪は、人物埴輪の１つで、右手は腰に、左手は頭の上に挙げている。この左手を挙げているポーズは手綱を引く姿、この写真では見えないが腰に鎌をつけている。その鎌は馬の餌となる馬草を刈るためのものと考えることができる。
つまり、この埴輪は、名前の通り、馬の手入れをする役割の埴輪だとわかる。また、この埴輪は、群馬の塚廻古墳で見つかっていて、国の指定重要文化財にも指定されている。

↑
踊る埴輪の場合

力士型埴輪



力士型埴輪も人物埴輪の１つで、大銀杏のような髪型をしている。この力士型埴輪は、亡くなった後も仕えていた王を守る力士の役割とされて置かれていた。腰に、ふんどしをつけていることから、力士らしくなっている。
また、左手を下げて右手を上げていることから踊っているようにも見ることができる。

↑
大銀杏

③埴輪をおいた理由

・道連れとして「いけにえ」にするような人々を出さないようにするため。（かつては、政権の重要人物が亡くなった場合、死んだ人の道連れとして特定の人々を生き埋めにする習慣があった。）
・境目の役割、土砂のせき止め目的。
・儀式に利用された。
・亡くなった人の魂が生まれ変わることを願って、人型の埴輪がおかれた。
・埋葬の儀式そのものを再現するため。
・その当時、日本には文字文化がなかったため。

➡今の現状では、理由は１つに定まっていない。

境目の役割とは？

・境目の役割とは、埴輪より内側は、安易に立ち入るべきではない重要な場所であることを示す。

土砂のせき止めとは？

・期間を経て、天候などによって古墳に積み上げられた土砂がくずれてきてしまうのをせき止めるために埴輪が置かれたという見方もある。

No.1　人型埴輪を置く理由

・日本書紀にもしるされている。
　殉職者の身代わりにするため。
・エジプトのミイラのように万が一、王がよみがえった時に、依り代（神のやどるところ）にできる人形を用意する目的として作り始めた。
・永続的に死者の遺体を魔物や天災から守るため。
・死者があの世で寂しくならないようにするため。

No.2　家屋型の埴輪を置く理由

・死者が死後の世界で不自由なく生活できることを目的とした。
・死者が生前と変わらぬ生活ができることを目的とした。
・死者の偉業を残す目的。

No.3　動物型埴輪を置く理由

・死者が死後も乗馬や狩りができるようにすることを目的とした。
・死者が飼育していた動物と一緒にいられるようにすることを目的とした。
・生前、行われた祭祀の様子を再現することを目的とした。

④２つの古墳の埴輪の置かれ方

No.1　保渡田八幡塚古墳

①埴輪の置かれ方

この保渡田八幡古墳の埴輪は、いくつかのまとまりで分けられていて、「ストーリー」のようになっている。上の写真のように54体もの人物埴輪・動物埴輪が出土している。今回は、その「ストーリー」を２つ紹介する。1つは右側のストーリー①で、この場面は、狩りの場面を再現している。この狩りは、犬がまずイノシシを追い込み、その後に狩り人がイノシシをはさみうちにするという狩りの仕方である。イノシシに注目してみてみると、イノシシの体に矢が刺さっていて血も出ている。僕は、この赤い血が気になり、この頃からインクらしきものはあったのかと疑問に思った。もしくは本物の動物の血だろうか？実は、この赤色は、朱やベンガラという水に溶けない粉末、つまり赤色顔料によるものだそうだ。次はストーリー②である。ストーリー②は、王との儀式の場面を再現している。王を中心となって色々な人が集まっている。最初に王に器を差し出しているのは巫女だ。また、周囲には王族、琴を弾く人、奉仕する女性がいる。武士と力士は、王の力を示しているのか、王を守る表現をしているようにも思える。そこで、この儀式と狩りを覚えてもらえるように４コマで表してみた。

No. 2　綿貫観音山古墳

①埴輪の置かれ方

この綿貫観音山古墳の埴輪も八幡塚古墳と同じように「ストーリー」がある。この綿貫観音山古墳には、とても有名な「ストーリー」があり、それは、「三人童女」という埴輪に基づく。この埴輪の特徴は、１つの台座に、正座した３人の巫女が乗っている。１つの台座に３人もの埴輪が乗っていることはとても珍しく、国宝に指定されている。３体とも背中には２枚の鏡をつけており、また、体の前で手を合わせ、手の平面に一本の弦が表現されている。琴を弾く埴輪は全て男性だが、この埴輪は女性で弦を弾く唯一のものである。奈良・平安時代、竹棒で弓の弦をたたき、その音により神や霊を呼び寄せてその言葉を伝える「梓巫女（あずさみこ）」という人がいたが、この埴輪も弓の弦を鳴らして邪気を払う儀礼を表現したものと考えられている。
そして、写真の左に王がいるのがみえる。この３人の童女は、王の儀式を盛り上げるための演奏をしているそうで、その王は、綿貫観音山古墳に葬られた王様を表していると言われている。その証が腰につけた「金銅製鈴付大帯」でこれと同じものが王の副葬品として出土している。円座形の台の上にあぐらをかいて巫女たちの演奏を聞いている。このストーリーをわかりやすくするために４コマ漫画にしてみた。

⑤まとめ

今回は、「古代人が埴輪に込めた想い」というテーマでこの東国文化自由研究に取り組んだが、埴輪ひとつひとつにストーリーがあることが何よりも驚きだった。古代の人々も人や物事に想いを持ち、それを埴輪という形に込める、もしくは埴輪で表現する、そのような事ができたのである。

かみつけの里博物館や群馬県立歴史博物館、そして埴輪の本等で様々な埴輪を今回見たが、古墳時代５世紀頃の埴輪と、６世紀の頃の埴輪には違いがあった。６世紀に作られた埴輪は、５世紀の物より、より作りが繊細になっていたり表情があったり、人、物、動物の表現の方法が変わっている。これは、他国との交流がより深くなったりという影響もあるのかもしれないが、人間の進化の現れでもあると僕は思った。この自由研究に取り組まなければ、気付かなかった事である。

狩りの場面を表現した埴輪、僕が最初に衝撃を受けたのは、イノシシの赤い血を再現しているところだ。イノシシに矢を命中させ、赤い血がでる。これは、その当時の生活の様子であり、赤を強調している事から、このお墓に埋葬された豪族がとても力を持っていたことを表現したかったのかもしれないと強く感じた。ひとつひとつその背景やストーリーを考えていくと、その古墳、その古墳で、埴輪の並べ方、数、形、どれひとつ全く同じ物はないのかもしれない。

僕は今回、２つの古墳の埴輪を見てみたが、日本には埴輪を並べた古墳が２０００基以上あるそうだ。群馬にも、まだまだ興味深い埴輪の並べ方をしている古墳は多い。僕はこれからも機会を作って、古墳や埴輪を見て、古代の人たちがどんな事を考え、どんな想いを込めて作ったのか考えていきたいと思った。

引用と参考資料

・Hani−本　あなたの知らない、はにわの世界
・関東古墳探訪　ベストガイド
・東日本最大級の埴輪工房
・４７都道府県遺跡百科
・古墳への旅　古代人のタイムカプセル再現
・はにわ人は語る　国立歴史民俗博物館
・tsulunos.jp/single.cgi?id=265
・jomo-news.co.jp/articles/-/150855　・pref.gunma.jp/01/bu0100032.html
・artexhibition.jp/topics/news/20200930-ＡＥＪ302071/
・かみつけの里博物館
・保渡田八幡塚古墳　・薬師塚古墳　・観音山古墳